「戦争未亡人」の戦争経験と生計活動

―「軍警未亡人」を中心に―

李林夏（イ・イマ）

1．　はじめに

戦争未亡人とは、戦争中に夫を亡くし、独り身になった女性たちを指す。韓国現代史では日帝強占期である第２次世界大戦と、朝鮮戦争そしてベトナム戦争が戦争未亡人を量産した。その中でも朝鮮戦争は数の上でも、少なくとも30万から50万人におよぶ女性を未亡人にした（イ・イマ、2004：28 － 34）。

朝鮮戦争未亡人はその構成が多様で未亡人と呼ぶにははっきりしない場合もあるが、「夫の不在」という現実が優先的に考慮されねばならない。これに従えば、朝鮮戦争未亡人には、夫が軍人や警察官・青年団体員・軍属などとして参戦して戦死、あるいは行方不明になった軍警未亡人、民間人として戦争中に死亡したか行方不明になった「一般未亡人」、拉致された人の夫人たち、左翼に関連して死亡したか行方不明になった人の夫人たち、米軍や軍人と警察によって虐殺された人々の夫人たちが含まれる。

この研究は、これらの中で軍警未亡人たちを研究対象とした。このように対象を限定した理由は、戦争未亡人たちが地域・階層のような社会的背景のみならず、未亡人になる過程、未亡人になった後に社会や国家と結んだ関係、社会活動の領域のような多様な要因によって戦争経験と生活の形態が異なるために、この研究の中にこれをすべて収めることができないだろうと考えたからである。

軍警未亡人の場合、戦争未亡人になる過程がよく似ていて、今なおイデオロギーの影響が強い韓国社会で夫の死と関連して堂々たる位置にあった。さらに少なくとも1960年代以降、大韓戦没軍警未亡人会を組織して自分たちを表現しうる組織体を持っていたという点も考慮した。そうでありながらもこの人たちは出身地域や、婚家や実家の経済力、主要活動空間のような多様な背景によって互いに異なる経験を経た。

この文章は、既存の研究成果を土台に、朝鮮戦争未亡人たち、その中でも軍警未亡人の戦争経験と戦争後の生活を扱った。特に可能な限り文献資料を排除し、面談を通じて得た口述資料を土台にして未亡人たちの声が最大限現れるようにした。このために17人の未亡人から、今までの生活が経てきた道筋について話を聞いた。これら17人の口述を土台に軍警未亡人たちの戦争経験、家庭内での位置の変化、経済活動について調べてみよう。

2．　女性の身で経験した避難の旅路

軍警未亡人たちにとって戦争は、家を離れて避難の旅に出たり、あるいは夫と離別する瞬間から始まった。避難と言う形式の移動は、町内の入り口を出たことのない女性たちにとって見慣れないものに対する怖れとして迫ってきた。特に夫のいない状態での避難は一層そのようであった。

避難の経験は居住地域によって差を見せる。特に接戦地域と非接戦地域は大きな差を示した。これを特性にそって漢江（ハンガン）以北地域、ソウルから洛東江（ナクトンガン）へと続く接戦地域、湖南（ホナム）

を初めとした非接戦地域に分けて概観してみよう。

まず漢江以北地域に居住していた未亡人たちは、ユン・ジョンヒ、イ・ジョンネ、チョン・ヒテだった。この中でソウルに居住していたユン・ジョンヒは朝鮮戦争の初期には避難できずにソウルに残留し、1月4日の（人民軍の）後退のときに避難生活を経験する。したがって彼女らの戦争経験は他の場合と異なり人民軍についての記憶が残っている。チョン・ヒテとイ・ジョンネは夫が警察官だったが、そのため人民軍、または左翼から被害をこうむったケースで、彼らに対する強い反感をあらわした。チョン・ヒテは人民軍が銃を引きずって家に入ってきて警察官だった夫を捜していた場面を記憶していたし、イ・ジョンネは警察の家族だという理由で家から追い出されて田舎の他人の家でお産をした経験を持っていた。

しかし、夫が民間人だったユン・ジョンヒの場合は、これらとは違っていた。ユン・ジョンヒの経験でもっとも特異な内容は、夫が人民軍の治下で義勇軍として徴集されたが途中で逃げて、その後、南韓政府によって国家に対する反逆問題で調査を受け、再び国民防衛軍に徴集された事実である。彼女はこの過程を説明しながら、特別な感情を表さないまま「運がよかった」、「めちゃくちゃに殴られた」、「苦労はしたが生き残った」と表現したが、漢江を渡れず残留していたソウル市民の苦痛を読み取ることができる。

これらとは異なり、ソウルから洛東江にいたる接戦地域に居住していた未亡人たちは、大部分、朝鮮戦争の直後に避難を経験した。これらの戦争の記憶は、無差別的な爆撃、人々が死んでいく姿、人と牛がもつれ合って洛東江の流れに包まれて押し流されていく姿、倭館（ウェグァン）鉄橋の爆撃、捨てられた子どもたちのように直接的な戦闘と関連していた。特に洛東江を挟んで繰り広げられた戦闘や避難民たちの行列、人々の死を「キュウリの冷汁」または「豆もやしの頭」のような日常生活と関連した言葉で表現するほどに鮮明に記憶していた。それほど数多い死を目撃した結果と思われる。

口述者のなかで、この地域に居住した未亡人は全部で11人だった。この中で避難をしなかった未亡人は山奥の村に住んでいたキム・ギブンと接戦地域以南だったキム・ハンギョンであり、ユン・ウォンソンは深い山に避難していたが前線が南側へ移動した後、居住地に戻った。これらの中でキム・ギブン、ユン・ウォンソンの記憶は避難を経験した他の8人の未亡人たちと違いがあった。この人たちに最も強く残っている記憶は、「パルチザン」や後退していた人民軍との出会いであった。そのようなわけで夜にはパルチザン、昼には軍に苦しめられて、男性たちは総じて家で眠らず、豆畑や野原に隠れて暮らした。

非接戦地域だった全羅道（チョルラド）地域に居住していたヤン・ソンウン、イ・テスン、イム・ナムジュは、避難したり身を隠したりした経験なしに居住地で朝鮮戦争を経験した。彼女たちにとって朝鮮戦争の経験は、戦闘や避難よりは夫や自分（イ・テスン）が国家反逆への加担を避けて隠れていた記憶や、パルチザンが「士気を挫く」ために虚空に銃を撃った記憶、飛行機が通り過ぎる音、爆撃などだった。彼女らにとっては朝鮮戦争より麗順（ヨスン）事件と連続したパルチザンとの戦闘の記憶がより鮮明で、かつ変わった大事件でもあった。

特にイ・テスンは朝鮮戦争前に夫が支署の主任として勤務していてパルチザンとの戦闘で戦死したのだが、このときの状況について生々しく記憶していた。彼女は「火だるま」や「裸一貫」といった表現で自分の生活を表現したりしたが、こんな表現の源は麗順事件にあることをたやすく感じることができた。それほど解放空間での麗順事件やパルチザン戦闘の激烈さが感じられるケースだった。

このように避難の経験は地域の状況によって多様だったが、彼女らの戦争経験が手に負えないものだったのは彼女らのほとんどが20－25歳の若い女性たちで、戦争期間に妊娠中だったり（ユ・ヒソン、イ・ジョンネ、チョン・ヒス、チョ・グミョン）、幼い子どもたちを抱えていたからであった。つまり誰でも経験する一般的な苦痛の上に、女性であることで経験せねばならない苦痛が加重されていた。

妊娠したのが21歳のときだったんだけど…着の身着のままで部隊へ駆けつけたらトラックに載せられました。…

当時、雨が降り続いていました。…そのとき、もう赤ん坊が産み月に入っていたのでお腹がものすごく大きかったんですよ。そんな状態で行ったんだけど、行ったら人民軍が撃ったのか、味方が撃ったのが分からないけど、約1メートル前にその銃弾が飛んできて、地面に…私に対して撃ったんだよ。…それでもそれが私を撃ったということも分からないでそのまま歩きました。…歩いて姑がいる避難所に行きました。（チョ・グミョンの口述：イ・イマ、2006）

それほど妊娠は避難の途についた女性たちにとって苦痛を加重させたが、チョン・ヒスはその苦痛を『腹は大きいのに30里の道を歩いていくんだけど、ちょっと行ってもおしっこしたくなるし、ああもう、いっそここで死んだほうがマシだ』と表現した。

幼い子どももまた妊娠とおなじくらい女性たちには苦痛だった。朝鮮戦争後の戦争孤児の数が10万人以上と推算されることがあるが、この中には捨てられた子どもたちも相当多かった。この過程をチョン・ナウォンは『1・4後退で避難するとき見たけれど、女1人でやり切れるもんじゃない。赤ん坊が2人だから。2人なら赤ん坊を1人負ぶわないといけないだろ。また何か食べるものを頭に載せないといけないだろ。赤ん坊に掛けてやるものもいるし。だから、その頃も男の子を欲しがる思想があって、赤ん坊が2人なら女の子は捨てていかないといけないんですよ』と説明した。そういいながら『子どもを負ぶって歩いたんだけど、何か食べてこそ乳も出るんじゃないかい、乳も出ないから赤ん坊が背中で泣くんだ。大きな荷物を持って歩かないといけなかったし。だからその子が死んだら、そんなに悲しい気持ちが沸かないんだって。すっきりしたんだって。』と北韓から下ってきたある未亡人の話を聞かせてくれたこともあった。

そのうえ夫がいない状態にあって嫁（未亡人）と嫁の幼い子どもは婚家の家族たちによって避難の旅路のお荷物と見なされた。すなわち、幼い子どもと共に経験する夫の両親のいじめは若い未亡人にとって空腹や疲れよりもっと重い苦痛だった。

自分の家のことだけして、私にはいつもただ「おまえはどこに行くこともできないのか」って。「何故、うちの家族にくっついて追ってくるのか」って。とにかく、私にどこかに行けっていうのよ。私が行ったらどこかへ行くんですよ。私は行くところもないよ。…夜になったら一晩中起きていて、赤ん坊が泣いたら「うんざりするよ。え、役に立たない2人の家族のせいで、うちが苦労する」って、老人たちが怒ってそう言ったら、私は何も言えないでただその赤ん坊を押さえて、晩になったらそうやって泣くんだよ。（イ・ジョンネの口述：イ・イマ、2006）

実はこの苦痛の裏面は、独り身になるということに対する恐怖であった。つまり家と町内の垣根を出たことがほとんどなかった女性たちにとって、舅姑のいじめは、1人で離れた時の恐怖よりは受け入れやすい状況だったのである。

（避難して）行っている途中で私が家族を見失ってしまったんですよ。生まれてこのかた井の中の蛙で、もっぱらここ蚕室（チャムシル）で暮らしてきて川向こうに嫁に行ったんだから、もうどこがどこやらも分からないでしょう。…上の娘を負ぶって、家族を見失ってしまったから、一銭の金もなくて。（ユン・ジョンヒの口述：イ・イマ、2006）

このように家族から離れて一人（または子どもと一緒に）残された時の記憶は、未亡人たちにとって見慣れない現実に対する恐怖と孤独感であった。その恐怖と孤独は、捨てられたようなケースではいっそう酷かったが、婚家の家族たちが自分と子どもだけを捨ておいて皆、避難してしまった状況を経験したある未亡人は、その話をしながらひとしきり言葉を継ぐことができなかった。その未亡人は先に家を出た夫が探しに戻ってくるときまで、ただ子どもを負ぶったまま呆然と立ってばかりいたという。

戦争前に、町内の入り口を出た経験のほとんどなかったこれらの戦争未亡人は、避難の旅に出発したとき

から、もうそれ以上はにかむ花嫁ではなかった。清州（チョンジュ）から統榮（トンヨン）まで、妊娠した身で１人で避難した経験、最初は遠足にいくように浮かれていたがその浮かれ気分はすぐに消えて夫と別れた経験、避難する途中で家族を見失って物乞いをしたり食べ物を作って売りながら暮らした経験、避難のあいだじゅう夫の両親のいじめに苦しめられねばならなかった経験、婚家から自分だけを残して避難した経験は戦争後に以前とは違った人生を生きるようになる動力として作用した。そのような経験は、彼女たちにとって新しい世界に対する怖れを無くし、舅姑に商売の元手に米の半枡でもくれと要求し、それを元手に徐々に独立した生活を営むようにさせ、婚家の財産に対する未練を捨て、独立する契機として作用したり、子どもの教育のために裸足で50里[1]の道を歩いて食糧を持ってくる不屈さとして表れた。

３．　夫の不在と家族

1)　夫の不在と分家

未亡人たちにとって戦争の記憶は、避難や身知らぬ環境から来る怖れ、または妊娠・出産した身の記憶としてだけ残っているのではない。事実、彼女たちの記憶において戦争と関連した記憶は、戦争そのものよりは戦後の記憶、つまり未亡人になって生きてきた現実についての記憶がいっそう強烈であった。そんな点から未亡人たちにとって夫との別れはむしろ戦争そのものだといえる。

軍警未亡人の夫たちが戦争に参加することになる過程は多様である。職業軍人から警察官、正常な入営手続きを経て、あるいは自ら志願した人（ユ・ヒソン）もいる。また戦争初期に道端や避難民村で強制的に徴集された事例も３人にもなった（キム・ハンギョン、ユ・ナミ、チョン・ヨンギ）。このように参戦過程はさまざまだが、別れる瞬間はあまりにもよく似ていた。総じて知らず知らずの間にそれが別れかどうかさえ分からないまま別れた未亡人が多かった。

> 顔も見れなかった。…行ったと言ってたよ。出発したって言ってた。（ユン・ウォンソンの口述：イ・イマ、2006）

> 外は真っ暗なのに、帰ってきて「俺、行ってくる」って言うんだよ。…今日、この下の町に行って演説をまた聴かなきゃいけいない、って言いながら出て行ったよ。…晩に出て行ったよ。（キム・ギブンの口述：イ・イマ、2006）

> タバコ買いに出て行ったんですけど、ヤンキー市場に。…それで捕まえていって戦場に放りこんだんだよ。だから人が帰ってこないんでしょう。うちのお婿さんは帰ってこなかった。…五日経っても戻らない。十日しても帰ってこない。（ユ・ナミの口述：イ・イマ、2006）

> 昼間は出て行って働いて帰ってくるんだけど、夜には突然令状が出たといって連れに来たよ。（ユン・ジョンヒの口述、イ・イマ、2006）

別れをまったく予想できなかったし、短時間のうちに行われた結果、夫と別れたという事実を認識するのに長い時間がかかりもした。これは未亡人たちの若い年齢と短い結婚生活も一役買っている。口述に参加した大部分の未亡人は20歳以前に結婚をし、短いものでは３カ月から、長いものでは３年程度の結婚生活を

1　訳注：日本の５里にあたる

維持した。さらに当時の風俗や嫁ぎ先の家の暮らし向きによって、1－2年程度、実家に留まっていて婚家に行ったので、ぜんぜん情が移りもしないうちに別れて顔さえちゃんと思い出せないという未亡人もいた。

夫との別れは、ただちに未亡人に「夫の不在」という新しい環境をもたらした。

未亡人たちに夫がいないという事実は、家族内での位置の変化をもたらした。特に分家は未亡人たちがもっとも最初にぶつかる問題だった。分家は未亡人たちに人格的な独立と合わせて経済的な独立を要求したという点で、ただ単に「夫に付いて舅姑から離れて出てくること」を意味していた以前の分家と違った形態と内容を持っていた。すなわち未亡人たちの分家は、社会が「女性社会の変化の根本的原因」として戦争未亡人に目をつけるようにさせた重要な過程であり、そして実際にも戦争未亡人が女性社会の変化の一つの軸として位置づけられるもっとも重要な過程だった。口述に参加した未亡人たちの分家は大きく4つの形態に分類できる。

第一の形態は、夫が戦死する前に分家した形態で、夫の職場関係や舅姑が早くに死亡したことに伴う分家であった。イ・テスンとチョ・グミョンは分家して夫が死んだのちに、婚家ではない実家の両親または実家の兄弟を頼って近くへ移住したということだ。チョン・ヒテは避難していたころから実家に頼り、戦争後、釜山(プサン)に移住した理由も実の兄の保護を受けるためであった。イ・テスンは1949年に夫が戦死した後、故郷の金堤(キムジェ)に戻って実家の隣に居を構えている。ただしチョ・グミョンは朝鮮戦争初期、婚家に戻って1年以上暮らして実家の近所に分家した。

第二の形態は、夫が戦死した直後、または3－4年以内になされる分家である。ヤン・ソンウン、ユ・ナミ、イ・ヨンス、イム・ナムジュ、チョン・ナウォンがこれに該当する。これらの共通点は夫が長男ではないという点だ。この人たちは夫が生きていたとしても、どのみち分家せねばならなかったので、早くに分家できたものと思われる。それでも、ヤン・ソンウン、イ・ヨンス、イム・ナムジュは婚家に近い場所に分家し、さらにイム・ナムジュはしばらくのあいだ姑と一緒に暮らさねばならなかった。ユ・ナミは婚家が完全に焼失したので一部破損した自分の家を夫の両親と小姑に明け渡してから実家の近所に分家し、チョン・ナウォンはソウルに職場を探して分家した。

特にこの人たちが分家するとき注目される現象は、婚家の家族との財産上の紛糾である。ヤン・ソンウンとイム・ナムジュは婚家がもともと貧しくて紛争の余地すらなかったが、他の人の場合は異なった。ユ・ナミは半焼して残った自分の家を舅姑と小姑に譲り渡してやらなければならなかった。分家以前に夫の両親が死亡したチョン・ナウォンとイ・ヨンスは夫の取り分だった遺産を夫の兄弟に取られた。

このように夫の兄弟たちが独り身になった未亡人の財産を奪うことはよくあることだった。財産を取られても苦境を訴える場所もなく引き下がる現実が、朝鮮戦争後の未亡人たちの置かれた立場であった。

分家の第三の形態は、夫が戦死してから相当期間が過ぎたあとで分家したケースである。ユン・ウォンソン、ユン・ジョンヒ、イ・ジョンネ、チョン・ヨンギがこれに該当する。この人たちは夫が長男の場合が多く、両親を養うことを当然だと考えて遅れて分家がなされていた。特にこれらは舅姑の虐待や監視が酷くて、これに対する記憶を今なおはっきりと心にしまいこんでおり、婚家暮らしを思い出しながら言葉を継げなくなったり、先に死んだ夫を怨んだりもした。

> 私は苦労して夜中1時まで…ひとしきり針仕事したら、私はやっているのに毎日お姑さんから怒られるんですよ。なぜそんなにさっさとできない、なぜそんなにできないんだって小言を言われます。あのときはなぜあんなに眠かったのか、わかりません。(イ・ジョンネの口述：イ・イマ、2006)

> 田舎で機織りして、木綿を紡いで、綿を摘んできたりして、そんなことをして暮らしたよ。赤ん坊に乳をやる時間もなしにその仕事をしおわったら、私がよく寝てしまって…(夜明けに)ほうきを持って門をやたらと叩くんだよ。[居眠っ

ていて］どうにか気がついて。

この人たちは婚家や実家に頼らず、自立的に分家が行われ、たいてい子どもの教育のために都市に入る傾向を示した。

最後に、分家しないまま舅姑と一緒に暮らしながら葬式まであげたケースである。キム・ギブン、キム・ビョンスン、ユ・ヒソンの３人がこれに該当する。彼女らはすべて夫が長男だという共通点を持っており、キム・ギブンは実家と婚家がすべて頑固な儒学者の家であり、ユ・ヒソンは婚家が本家の家柄であった。つまり頑固な気風の影響と夫の両親を養わねばならないという義務感が分家を妨げた。

以上の４つの分家の形態と異なる姿を見せる事例は、キム・ハンギョンとチョン・ヒスである。キム・ハンギョンは嫂が家族の中の権力を行使していて夫の両親が死亡した後、家産を整理して都市に出てしまったので仕方なしに分家した。これは家族の中の権力構造の面でも特異だが、分家過程でも相当に受動的に対応したケースであった。チョン・ヒスは息子の病気治療のために夫が戦死してから５年くらいたったあとで都市に移住した。

2)　再婚と子女教育

分家とともに未亡人たちが家庭の中でぶつかったもう一つの問題が再婚であった。再婚の問題は軍警未亡人のみならず、すべての未亡人の問題であった。実際に再婚する未亡人も多かったが、口述過程でもこれに関する話が多数あった。

（戦争中に未亡人になった人が）多いですよ。うちの身内に５人そうなって…１人は息子が２人いたんだけれど、６・25[2]のときにその息子も亡くしたんだよ。それで再婚して。…１人は息子は全然いないんだけど、実家から来て連れていって再婚させて。（ユ・ヒソンの口述：イ・イマ、2006）

（統榮未亡人会の）会員は約20人になったんですが、よく再婚をして、貧乏しているから嫁に行くし、お隣、その近所でも再婚して…約28人か、そう、後には18人か20人か、再婚しました。たくさんの人が結婚をして。（チョ・グミョンの口述：イ・イマ、2006）

一般的に軍警未亡人を含む未亡人の再婚を妨げる原因は子どもの問題であった。さらに社会でも未亡人の再婚と関連して未亡人よりは子どもの養育をより問題にして、子どもがいる未亡人の再婚を否定的な眼差しで見た（イ・イマ、2004：214－215・218）。口述に参加した未亡人たちもまた子どものある場合、再婚のことを考えずに子どもの養育に真心を注いだものと見える。

このほかにも実家の両親の頑固な態度のせいで、または「夫が明日にでも生きて帰ってきそうで」「北韓に生きているようで」再婚をためらうこともあった。このように多くの制約によって再婚を考えさえしない未亡人が多かったにもかかわらず、多くの未亡人たちは再婚するかもしれないという監視の目に苦しめられねばならなかった。

うちのお姑さんが毎日、実家のうちの姉さんたちが来たら「おまえ、妹を説得して嫁に行かせようって来たのかい」って言うんです。それでうちの姉さんがあんまりにも悔しくて、その声を聞きたくないっていって言って全然来てくれもしな

2　訳注：朝鮮戦争

いし。（イ・ジョンネの口述：イ・イマ、2006）

私は家で仕事だけするでしょ。あちこち遊びにも行かさないの。1人で置いといて、しばらくでもどこかにちょっと居て戻ると「どこ行ってきたのか」って怒るし。…床机みたいなのを組み立ててそれを門の前に置いといたら、毎日（舅姑が）そこに座って…絶対にうちに遊びにこれないんですよ。（キム・ビョンスンの口述：イ・イマ、2006）

外の畑に行って帰ってこられたら意地悪して、こんなふうにね、「誰かここに来て帰ったんじゃないか？」っていうくらいに。それで後はもう駄目だから私が一緒に畑で草取りして。（チョン・ヨンギの口述：イ・イマ、2006）

このように未亡人たちは家では婚家の家族、実家の両親からの監視の目に苦しみながらも、外では火遊びの対象だった。

会社が退けたら、どこかの奴らが後ろから付いてくるんだよ。…「しょっちゅうお尻を追いかけて歩いてるのか」と言ったら「ちょっとのあいだ恋愛しよう」っていったよ。…「あんな犬みたいな奴ら、人をこんなふうに見下して」って思って。これウソじゃないけど、私は数人の頬っぺたを引っぱたきました。そのようにして暮らすのがどれほど悲しいか。（チョン・ヨンギの口述：イ・イマ、2006）

このように家庭の内外で苦しめられながらも大部分の未亡人たちは子どもを動力として不屈に生きてきた。その結果、口述に参加した未亡人の大部分が子どもに対する自慢と満足を気兼ねなしに話したりした。特に子どもの教育問題についての未亡人たちの熱望は相当に強烈だった。チョン・ヨンギは一人娘を大邱（テグ）にある中学校に行かせるために自分が十年以上、農業をし、機を織って稼いでおいた婚家の財産をすべて放棄して、裸一貫で大邱に分家した。またキム・ギブンは舅といっしょに同居して、凶作の年には山菜などで命をつなぎながらも、息子と娘を安東（アンドン）とソウルに留学させる不屈さを見せた。キム・ビョンスンの場合も同様で、姑が「大学に絶対行かせられないっていうんですよ。…先祖にひもじい思いをさせるからだって…田畑を全部売り払ったらもうチェサ（先祖に食べ物を備え真心を示す儀式）もできないと」反対するのを押し切って息子を大学に行かせた。このような不屈さは大部分の口述者がよく似ていたが、特に故郷を離れて都市に行った契機が、ほとんど子どもの教育問題であった。口述者の中で子どもの教育のために故郷を離れたケースは、ヤン・ソンウン、ユ・ナミ、イ・ヨンス、イム・ナムジュ、チョン・ヨンギ、チョ・グミョンなどだった。

このように口述に参加した未亡人たちが子女教育に熱中したのは、彼女らが頼ることのできる対象はまさに「子どもたち」だったからである。その結果、大部分の口述者たちの子どもたちは周辺の親戚・姻戚より高い学歴水準を示した。これには未亡人たちが見せた子どもへの期待のみならず、次のような要因が作用したものと思われる。

まず口述に参加した未亡人たちの学歴水準が同じ世代の女性たちに比して高いという事実である。口述対象者たちの中で小学校中退以上の学歴を持ったケースが76.5％に達しているが、これは同じ年齢層の女性たちの中で小学校中退以上の学歴をもつケースがわずか30％ほどだったことに比して非常に高い水準だった。

次に口述対象者たちが持っている子どもの数が同じ世代のほかの家庭に比して少なかったという点である。彼女らのような年齢層の場合、ふつう4－5人以上の子どもがいたのに比して口述対象者たちは平均（子どもがいない2名を除いて）1・87人の子どもがいた。これは40歳未満の未亡人の扶養子女が平均2.07人だったという1952年政府の統計とも（大韓民国公報処統計局、1953:29－30）似たような数値である。

したがって未亡人たちは教育費負担という面で、同じ世代のほかの女性たちに比して有利な位置にあった。

4．　戦争未亡人の経済活動

分家の可否や、財産の多少に関係なく、大部分の未亡人たちはどんな形態であろうと労働をせねばならなかった。口述に参加した軍警未亡人たちの経済活動状況を概観すれば次の通りである。

第一に、農村地域に居住していた大部分の未亡人はどんな形態であれ農業労働に参与している。口述に参加した未亡人たちはそのときまで男性がする仕事と思われていた米作りまで始めたが、これは未亡人たちの立場が切迫していたことを意味すると同時に、未亡人たちがすでに一つの家庭の家長になったという証明であった。

> 私はそこで農業してね。どんな仕事でもやったよ。鋤で畑を耕すのだけはしたことないけど。田んぼの草取りをしなくちゃいけないし、水をくみ出さないといけないし、苗を植えにいかなくちゃいけないし、雑草を抜きにいかなくちゃいけないし、畑仕事もしなくちゃ。山に通いながら柴刈して焚き木を集めたから、今は、私は山に行かないよ。山はぞっとする。（ユン・ウォンソンの口述：イ・イマ、2006）

> あのころは男だけが田んぼで仕事をしたんですよ。畑仕事は女だけがしたでしょ。うちはそんな区分もありませんでした。種籾を集めて、稲を刈って、あらゆることを全部しました。私がご飯も全部作って、山に行って焚き木もみんな集めて焚いて、…あとは便所の水をくみ出さないといけないんですよ、それも私が昔の水を運ぶ背負子みたいなものを担いで、畑に持っていって、かけて。（キム・ビョンスンの口述：イ・イマ、2006）

第二に、行商や小規模雑貨商が重要な経済活動のなかの一つだった。行商の経験を持つ未亡人は全部で7人（キム・ギブン、キム・ハンギョン、ユ・ナミ、ユ・ジョンヒ、チョン・ヨンギ、チョン・ヒテ、チョ・グミョン）であり、2人（イ・ヨンス、チョ・グミョン）は雑貨商を営んだ。このように全体の半分におよぶ口述者が行商や雑貨店を営んでいた理由は、特別な技術や多くの資本を持てなかった未亡人たちがもっともたやすく接近できたからであった。キム・ハンギョン、ユ・ナミ、チョン・ヨンギは分家初期に行商（露天商）で生計を営んだが、これは分家するとき何も持たない裸同然だったからだ。

> 大邱への80里を朝に通勤車で行って、夜に通勤車で帰ってきて。…服を担いで、チョゴリみたいなものもこうして担いで。風呂敷包み一つを売って通勤車で帰ってくる。…田舎はそのころでもね、カマスでお米をくれればお米をもらい、麦くれれば麦をもらい、稲をくれたら稲をもらって。…そんなものもくれたら売る欲心でそれを私はみんな受け取りました。受け取って。…ぜんぶ、頭に載せて帰ってくるのは…風呂敷包み一つくらいを頭に載せたら重くって…。（ユ・ナミの口述：イ・イマ、2006）

しかし行商は非常に辛い仕事だった。そのうえ1950－60年代の農村では、物の代金を現金ではなく米や麦、大豆のような現物で支払った。その結果、売る品物と受け取った穀物など、多くの荷物を頭に載せて歩いていて腰や首、足に無理がきて倒れることもあったが、チョン・ヨンギ、ユ・ナミは数十年経った今までもその後遺症を持っていた。

第三に、裁縫の賃仕事で家族の生計を率いることもあった。裁縫の賃仕事は、行商より遠距離を移動せず、

子どもたちといっしょに過ごすことができる長所はあるが、休む暇なしにしなければならない労働だった。裁縫の賃仕事という労働の疲れを、戦争未亡人である母を持っていたある作家は「苦労して貯めたお金で手回しミシンを一台用意して裁縫仕事で夜明けから夜の12時まで」休むことなく働いたと表現しているが（キム・ウォニル、1988:14）口述に参加した軍警未亡人たちのなかで裁縫の賃仕事をしていたイ・テスン、ヤン・ソンウン、イム・ナムジュの経験もまた同じであった。

> すぐ下の妹が部屋を一つあてがってくれたよ。…その家の所帯も手伝って、飲み屋の店の手伝いもして、その飲み屋の女たちの裁縫仕事をしようと思ったら、ああもう、時間でお針の賃仕事を請け負ってしようと思ったら、ただもう疲れて死にそうだった。…針仕事ってやつは夜昼ないんだよ。晩にでも楽に休めたらいいけれど、とても休めたものじゃない。…今はもう針を持つのもいやだ。ぞっとするから。（イ・テスンの口述：イ・イマ、2006）

第四に、1960年代に入ってから工場労働者になる未亡人が増えた。ここには2つの要因が複合的に作用した。まず工業化政策の結果として工場労働者が増加し、未亡人たちにも就職の機会が広がった。ゆえに朴正熙（パク・チョンヒ）政権は1961年に軍事援護庁を設置し、「軍事援護対象者任用法」、「軍事援護対象者雇用法」のような法律を制定して傷痍軍人・警察官と戦没軍人・警察官の遺族に対する就職斡旋を始めた。その結果、1961年から1962年の間だけでも32,302人の報勲対象者たちが職場に斡旋されたが（国家報勲処、1992：121）このとき軍警未亡人の一部が、工場・専売庁などに就職した。口述に参加した軍警未亡人のなかでキム・ハンギョン、ユ・ナミ、ユン・ジョンヒがこのとき工場に就職して労働者になったし、チョン・ヨンギはこれより遅い1960年代末に同じ経路を経て工場労働者になった。しかし1960年代の政府の戦争未亡人職業斡旋政策は地域的にひどい偏りをみせた。資料によれば、政府はソウルと大邱の2ヶ所にだけ戦争未亡人職業補導所（職業紹介所）を作り（『京郷（キョンヒャン）新聞』1963年4月25日）、数ヵ月後に、龍山（ヨンサン）に職業補導所一ヶ所を追加で設置した（『京郷新聞』1963年7月6日）。実際に口述過程に参加した未亡人のなかで政府の紹介で工場に就職した4人を、就業地域を基準に分類すれば、大邱3人、ソウル1人であった。さらに未亡人たちは大部分、とりたてて技術がなく、若い未婚労働者たちに比して学歴が低かったので、包装作業や荷物を運ぶ仕事のような単純労働に配置された。

> （行商に出かけていたが）一晩泊まってから帰ることがあって、私はこんなに離れていたらだめだ、就職をしなくちゃいけないと思って、そのときから就職をしました。そう、製紙工場に通いました。（チョン・ヨンギの口述：イ・イマ、2006）

> 一番最初、ゴム工場に行っていました。…技術がないですからね。そしたらこの手が痛いし、ハサミを使う仕事を一日中しおわったら手がこんなふうに握れないしね。女も多くて、男たちもいて。テファゴム工場っていうんですよ。（ユン・ジョンヒの口述：イ・イマ、2006）

辛い労働にも関わらず、工場労働者になった未亡人は定期的で安定的な収入を保障されることができた。じっさい常に経済的不安感を抱いていた未亡人たちにとって経済的安定性は何ものにも代えることのできない恩恵であった。

このほかにも、チョン・ナウォン、チョ・グミョンのように公務員になったケースもあった。このケースはある程度の学歴がなければ不可能だったので、一般的な経済活動ではなかった。またチョン・ヒテの場合は何回か行商の経験があったが、夫が残した遺産と実家の助けで息子が大人になるまで生計を維持した。

5.　終わりに

戦争未亡人たちの戦争経験と戦後の生活を聞く仕事は、他の戦争経験者たちの場合と同様に破片化された戦争の記憶を呼び戻し、決して一様ではない戦争史を書き直す作業である。

この間、朝鮮戦争史は戦争未亡人という範疇をつとめて無視した。だがしかし、戦争未亡人たちの戦争史は廃墟、残酷さ、勇敢な兵士たちと将軍たちのような今までの公式化された戦争史とは違った姿を見せた。

戦争未亡人たちにとって朝鮮戦争は自分のおかれた状況のなかで記憶されていた。清州から統榮まで妊娠した身で魂の抜けた人のように避難した話。遠足に行くように浮かれていたがその浮かれ気分もすぐに消えて夫と別れた話。避難の途中で家族を見失って物乞いをして暮らした話。避難の間中、夫の両親の嫁いびりに苦しまねばならなかった話。婚家で自分だけを置いて避難した話は、公式的な戦争史として記録されていない。これは戦争史を男性は前方で戦う兵士として、女性は後方で保護される存在として記録し、男性中心の戦場の記録や政策決定過程を優先したからである。これら戦争未亡人にとって、妊娠した、または出産した自分の体と幼い子どもを連れて出発した避難の旅路はいまでも鮮明な戦争の記憶だった。しかしこのような記憶は夫が戦場へ発ったときにようやく「未亡人」という公式的な記憶、待つことと孤独に転換される。

事実、戦争未亡人たちの涙は大部分、戦争期間の惨たらしさや避難生活、死んだ夫に対する憐憫ではない、戦争後に経験せねばならなかった孤独と悲しみから発している。この文章を書く過程で筆者が出会った戦争未亡人たちは、例外なしに夫が戦死した後の婚家の家族たちとの関係を語りながら悲しそうに泣いたし、子どもを飢えさせないようにするために、または子どもを教育するために注いだ苦労にため息をついた。これは戦争未亡人たちにとって戦争は1950年6月25日ではなく、夫が自分の傍らから消えた、あるいは婚家の垣根を出た瞬間に始まったことを意味する。そのときから戦争は、野原と工場、他人の家の台所、夫の両親と対面する縁側の下に移され、軍警未亡人にとって日常は「死ぬ気で生きた」という表現がうそでないほどに手ごわい生活であった。

【永谷ゆき子　訳】

参考資料

国家報勲処、1992、『報勲30年史』

国防軍事研究所、1996、『韓国戦争被害統計集』

金貴玉、2004、「分断、朝鮮戦争と女性：1950年代韓国女性の暮らし」、『韓国現代女性史』ハンウルアカデミー

キム・ギス、1957、「戦争失踪と婚姻」、『延世法学』第1集、延世大学校法学会

キム・スクチャ、1959、『ソウル市婦女職業調査』、地域社会開発局・国連駐韓経済調整官室

キム・ウォニル、1988、『庭深い家』、文学と知性社

内務部統計局、1959、『大韓民国第1回簡易総人口調査報告（檀紀4288年9月1日現在）：全国編』

大韓民国公報処統計局、1953、『1952年大韓民国統計年鑑』

大韓民国内務部統計局、各年度、『大韓民国統計年鑑』

大韓戦災婦女会 結成大会、1955、「趣旨書」

保健社会部、1987、『婦女行政40年史』

保健社会部、1964、『保健調査白書』

援護処、1969、『韓国援護制度発展過程』

イ・リョンギョン、2003、「朝鮮戦争前後の左翼関連女性遺族の経験研究－女性主義平和概念から」聖公会大　市民社会福祉大学院修士学位論文

イ・イマ、2000、「朝鮮戦争が女性の生活に及ぼした影響－1950年代'戦争未亡人'の暮らしを中心に」、『歴史研究』第8号、歴史学研究所

イ・イマ、2004、『女性、戦争を越えて立ち上がる』、西海文集

イム・ビョンヒョン・コ・ギョンスク、1959、『ソウル婦女者職業補導所 踏査報告書』、駐韓米国経済協助処・地域社会開発局

鄭飛石、1958、『誘惑の川（上・下）』、新興出版社

合同通信社、1959、『合同年鑑（4292）』

『東亜日報』、『京郷新聞』、『朝鮮日報』、『女苑』『女性界』

口述資料

キム・ギブン、キム・ビョンスン、キム・ハンギョン、ヤン・ソンウン、ユ・ナミ、ユ・ヒソン、ユン・ウォンソン、ユン・ジョンヒ、イ・ヨンス、イ・ジョンネ、イ・テスン、イム・ナムジュ、チョン・ナウォン、チョン・ヨンギ、チョン・ヒス、チョン・ヒテ、チョ・グミョン（『韓国での戦争経験と生活世界研究』、漢城大学校 戦争と平和研究所）